

博士学位論文審査要旨

氏 名	立神 作造
学 位 の 種 類	博士（歴史民俗資料学）
学 位 記 番 号	博乙第 68 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 7 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文の題目	奄美大島における今日の葬儀の民俗学的研究—龍郷町円および宇検村平田・湯湾の事例を中心として—
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 小熊 誠 副査 神奈川大学 教授 周 星 副査 神奈川大学 教授 後田多 敦 副査 琉球大学 名誉教授 津波 高志

【論文内容の要旨】

本研究は、日本本土とも沖縄とも一線を画した特有の文化的背景を持つ奄美大島を中心として、今日行われている葬儀における伝統の変化と継続の関係性を分析した。

本研究の目次は以下のとおりである。

第1章 本論の目的

第1節 研究課題と研究方法

第2節 基礎的概念と先行研究

まとめ

第2章 龍郷町円における葬儀

はじめに

第1節 龍郷町円の概要

第2節 土倉のころの葬儀

第3節 今日の葬儀

まとめ

第3章 宇検村平田・湯湾における葬儀

はじめに

第1節 宇検村平田・湯湾の概要

第2節 土倉のころの葬儀

第3節 今日の葬儀

まとめ

第4章 二つの事例の比較検討

はじめに

第1節 葬儀における外部化の部分

第2節 葬儀における非外部化の部分

まとめ

第5章 今日の葬儀の構造

- 1 分離儀礼の継続性
- 2 伝統儀礼の変化と継続性
- 3 葬儀の外部化と奄美大島の伝統の継続性

参考文献

参考資料

本論文の概要は、以下のとおりである。

第1章では、本論文の目的および研究課題と研究方法が示されている。まず、本研究の発端は、土葬の複葬制が行われていた奄美大島において、火葬の導入と普及は、葬送儀礼を葬式業者へ外部化とともにそれぞれの地域における伝統の葬送儀礼の変化と継続という問題と直面した。この現代における葬送儀礼の変化について、資料とともに実地調査を通してその現状を調査し、その内容について民俗学的に検討することが本論文の目的である。

調査については、2015年から2023年までのべ1年間にわたる現地調査を行った。龍郷町では円を中心に安木屋場および龍郷、宇検村では平田と湯湾を中心に安室および屋鈍で調査を行った。

第2節では、葬制と墓制に関する基礎的概念を整理し、奄美大島における近世以降の葬制と墓制について先行研究を整理してまとめた。奄美大島における土葬から火葬への移行は、葬儀の第一次葬の後数年経てから行われる第二次葬としての洗骨改葬が消滅していくことと結びつけることが研究されている。

第2章では、人口減少と高齢化が比較的ゆるやかな龍郷町円における葬儀について、土葬と火葬の葬儀を比較し、その変化を検討した。円においては、1990年代まで土葬が行われていたが、現代では直接観察は行えない。当時は、集落の人総出で土葬の手伝いを行い、墓堀（池堀）や棺桶、龕蓋、花、弔い旗などを手作りし、炊事なども準備した。土葬の頃は人が亡くなるとすぐに葬式が行われ、通夜はほとんど行われなかった。夕方近くになると遺体を湯灌し、清めが済んだあと帷子を着せ、足袋を履かせ、小銭を白袋に入れて首から下げ、故人の愛用品を棺に納めて旅支度を整えた。遺体を棺に納め、近い身内の人4名で担ぎ、参列者は墓まで葬列した。集落の人ほとんどは、参列した。墓地で埋葬すると、僧侶の参列もなく参列者は焼香をして帰宅した。

この葬式は、奄美以外の地域とおおきく変わることはない。しかし、埋葬してから数年後、円を含む周辺の地域では、遺体の骨化を待ってから墓を掘り起こして海岸近くの河口付近で遺骨を海水や水で洗骨し、それを骨壺に入れて墓のそばあるいは納骨石塔に埋め直した。これを洗骨改葬といい、近世以前から行われていた風葬の儀礼が、奄美において土葬になっても継続して行われていた。

2000年代に入ると、円では土葬から火葬に変化していった。さらに、名瀬から葬祭業者が進出するようになり、少子化を補うように地域の葬儀業務を担うようになった。それに伴い、葬儀も自宅での葬儀から名瀬市内の葬儀場に移行して行われるようになった。しかし、円では名瀬市内の葬祭場でソウシキが行われ、その後奄美市斎場に移って火葬が行われる。火葬が終わると集落に帰り、夕方より共同焼香場に集落の人が集まり、ノウコツノギが行われる。この葬儀は、葬儀社の進行により行われ、僧侶の読経に引き続き家族・親族が焼香をし、そのあとに集落の参列者によって焼香が行われる。焼香が終わると、家族・親族と集落の参列者は葬列をつくり、共同墓地まで歩く。墓地に着くと、火葬骨を安置した桐箱から骨壺を取り出して納骨堂に納骨する。共同墓地で焼香して拜んでから、帰宅する。喪家では、家族・親族と葬儀を手伝ってくれた人や集落の近い人たちは、ソーメンの吸い物や豚の煮物などと酒でねぎらう。ここでの問題は、葬祭場でソウシキの儀礼が行

われるのに、集落の人たちは集落の共同焼香場において再びノウコツノギで葬儀に参加する。つまり、二回の葬儀が行われることである。

第3章では、奄美本島南部に位置する宇検村の葬儀について検討されている。宇検村は、近年に至るまで土葬を伴う複葬が行われており、葬儀は神官や僧侶の儀式を受けずに地域の人々の手によって執行されてきた。しかし、1966年に瀬戸内町営火葬場が開設され、火葬が一般的になってきた。そして、葬儀も葬儀社の提供する瀬戸内町や名瀬の葬祭場で行われるようになった。

葬儀社によって、死者を葬祭場において通夜が行われるようになった。土葬の頃は、通夜は行われなかった。そして、葬祭場で告別式が行われ、集落の知人も参加する。その後火葬場に行き、火葬をして収骨が済むと平田共同墓地に遺骨を持っていく。平田共同墓地広場で、ノウコツノギが行われ、家族・親族の他に集落の人々が参列する。この地域でも、葬儀社での告別式と平田共同墓地でのノウコツノギが、2回の葬儀として行われる。

2回の葬儀が行われるようになったのは、奄美大島の他の地域と状況は似ている。ただし、平田と湯浅では集落における墓の共同化が行われている。宇検村では、高齢化によって家ごとの墓の管理は困難になっている。平田では、県道沿いに約80基の家墓が建立されている共同埋葬墓がある。しかし、高齢化が進み、さらに村外に移住した複数の親族の墓も含めて毎月旧暦一日の墓参りが困難になり、さらに他出移住者の村内に残した墓の「祖先の拝み」と「維持管理」、そして無縁墓の処理など多くの問題が浮上してきた。そこで、平田村落全体の共同納骨堂建設の検討が行われた。建設地の確保、建設資金の工面、墓地管理の問題、家ごとの墓地に対する「イエ」観念など賛否両論で1989年から27年を要して2016年に完成した。

共同納骨堂の建設は、宇検村では1967年の田検村落共同納骨堂「精霊殿」から始まり、2021年建設の佐念共同納骨堂「やすらぎの里」まで10の集落で行われている。実は、鹿児島県内地の大浦町においても、共同納骨堂が建設されている。しかし、大浦町と奄美の宇検村では共同納骨堂の使用観念が異なる。大浦町では、子孫が他出してしまい、各家の墓地が永続しなくなる。それを懸念して、大浦町の共同納骨堂あるいは仏教寺の共同納骨堂でその家の祖先の遺骨が永続的に供養されるという、イエによる祖先の遺骨の永続性から集落あるいは仏教寺による遺骨の永続性へと変化がみられる。それに対して、宇検村では、父系によるイエで墓を永続するという観念がもともと強くなく、他出した親族の墓も祭祀している。その親族は父系とは限らず、母系親族もあるし、近隣などの関係で祭祀を行っている。この関係は、奄美における多系的な「ヒキ」の親族関係による「ハルチ・ハロチ」の親族関係で、それら多様な親族関係で共同納骨堂に入る。さらに、無縁者の遺骨も加える。宇検村では、「シマと他出者の相互関係」と「シマへの共属性」による相互補助によるもので、鹿児島県内地との親族関係が異なる点が指摘できる。

第4章の「二つの事例の比較研究」では、龍郷村円と宇検村平田・湯湾で行われている葬儀事例を比較し、今日的葬儀における外部化の部分と非外部化の部分について検討した。

奄美地方では、1990年代以降土葬から火葬に変化するとともに、葬儀業者が進出してきた。葬儀社は、新聞広告掲載や死亡届、火葬利用届から葬具などの準備、ソウシキの執行、埋葬許可書の手配、ノウコツシキの進行、直会準備など全国的な葬儀社との情報を交換しながら奄美地域でも市場を拡大し、葬儀の外部化が進んできた。これに伴い、死者儀礼の簡略化と簡素化が行われてきた。土葬の時代は、死後三日目のミキャンナカ（三日七日）には近親によって供養を行い、シジュウクニチ（四十九日）には親族によって墓参を行って食事を共にした。しかし、火葬が普及すると、納骨後にミキャンナカを行い、二三日以内にシジュウクニチが行われ、通夜からシジュウクニチまで数日に短縮し、死者儀礼そのものの簡略化と簡素化が進んでいる。

人が亡くなると、時計を止め、死者を北枕に安置し、納骨と焼香まで死者の確認から納骨までの

諸儀礼は、火葬の現在も土葬のころと大きく変わらない。ただし、土葬時代のイケホリや第二次葬の洗骨改葬、ユタによるマブリワーシ（死霊別し）などは今日の葬儀ではほとんど行われなくなった。しかし、頭骨に対する伝統的な観念は変わらないと考えられる。土葬のころは死体を埋葬して数年経過したのちに第2次葬として洗骨改葬を行い、骨を壺に入れて頭骨を一番上に納めた。火葬が定着した今日において、火葬場で足から順番に壺に骨を入れ、最後に頭骨を納める。土葬では複葬が行われ、火葬では単葬として儀礼体系が大きく変化した。それにもかかわらず、シマの人々が持っている頭骨に対する伝統的価値観は残存している。

第5章では、「葬儀の外部化と非外部化の構造」として、葬儀社が葬儀場で行うソウシキは葬儀の外部化であるが、集落の共同墓地あるいは共同納骨堂で行われるノウコツノギは、シマの人が参与する死者儀礼であり、シマの人々によって行われる「相互扶助」であり「互酬関係」によって行われ、伝統的な死者儀礼の一部を継承する非外部化の儀礼と考えられる。また、「葬儀の伝統と遺骨との別れの儀礼化」では、葬儀社によって行われるソウシキは一般的な遺体に対する別れの儀礼に対して、ノウコツノギでは遺骨に対する別れの儀礼である。土葬時代の洗骨改葬は、骨の浄化を儀礼化したのであるが、火葬に変化しても短い時間で遺体を浄化してノウコツノギで遺骨への儀礼を行うのは奄美の伝統的儀礼が継続されている。「葬儀の外部化と奄美大島の伝統の継続性」では、奄美大島で葬儀の外部化によって葬儀の本土化が進む一方、それぞれの地域で伝統的な葬儀の一部が受け継がれ、今日的な奄美大島における葬儀が文化的に変化していることを検討した。

【論文審査の結果の要旨】

奄美大島の文化は、日本本土とくに鹿児島県の文化圏と琉球・沖縄の文化圏の境目にあり、双方の文化をうまく導入しながら奄美大島の文化を形成してきた。そして、その具体的な文化として本論は今日的葬儀の変化を調査し、検討を行った。

奄美大島の葬儀については、琉球時代であった15・16世紀には琉球と同じように風葬が行われていた。薩摩藩の琉球侵攻によって、1609年から奄美群島は薩摩藩の直轄領となった。それ以降、奄美は墓制を薩摩文化に合わせて土葬に変化していったが、埋葬数年後に洗骨改葬が行われたことは遺骨に対する観念が琉球のように継続していたことが理解できる。奄美地域の風葬から土葬へ、そして近年の火葬への変化に対する調査、研究は他研究者によっても多く行われている。本論文は、その研究動向の中で、奄美大島北部の龍郷町円と南西部の宇検村における調査を比較しながら、さらに土葬から火葬に移った葬儀について葬儀社の外部化とシマの非外部化の視点で検討したことが評価できる。

つまり、火葬が普及すると、奄美市内の葬儀社によって葬祭場で通夜からソウシキ、火葬まで行われる。これは、全国的に葬儀社によってほぼ同じ儀礼で行われる葬儀になる。日本本土における他地域の葬儀社による葬儀は、ほぼ同じように行われるが、火葬の後に遺骨を集落共同墓地あるいは集落共同納骨堂で集落の人々が参列して行われるノウコツノギは奄美地域の独特な今日的葬儀となっている。葬祭場で行われる通夜から火葬までの葬儀は、一つの葬儀と考えられよう。したがって、集落で行われるノウコツノギはもう一つの葬儀と考えられる。本論文では、この葬儀の状況に対して、「葬儀が2回ある」という表現があるが、葬儀を理論化して説明すればどこからどこまでが「一連の儀礼」であるのか。また、「葬儀場の葬儀」と「集落における共同墓地での葬儀」は、この集落において2回の葬儀と考えられるのか、あるいは全体として一つの葬儀と考えられるのか、この点についてきちんと論理的に検討すべきであった。

さらに、この件について、最近では高齢化や人口減などがさらに進み、「葬儀場の葬儀」は行う

が「集落における共同墓地での葬儀」が行われなくなっている。今後は、この点も踏まえてこの地域の葬儀の変化を検討すべきと考える。

龍郷村円および宇検村における葬儀関係の調査は、長い時間にわたった聞き書きと資料収集によって多くが收拾されている。その資料を用いて調査報告の場面は丁寧にまとめられている。しかし、その資料を整理して分析する部分は、繰り返しの表現も多くよく整理されているとはいい難い。しかし、論文博士としての申請であり、8年間にわたる調査を論文に組み立てた点は、今日の葬儀を新たな視点を加えて検討したとして評価できる。

以上、審査の結果、本論文が博士（歴史民俗資料学）の学位を授与するに相応しい内容と価値を有するものと審査員一同判断した。